

Newsletter

附属学校ニュースレター

第22号・2016年3月10日

近畿国立大学附属学校連盟・PTA連合会総会、実践活動協議会の開催

附属中等教育学校副校長 吉田 隆



平成27年5月23日（土）近畿国立大学附属学校連盟およびPTA連合会総会を、奈良女子大学附属中等教育学校において開催しました。

当日は、全国国立大学附属学校連盟より副理事長太田伸也様、全国国立大学附属学校連盟事務局より田中一晃様、全国国立大学附属学校PTA連合会より岡山和広様、加々見寛行様、久保眞司様、奈良女子大学より角田秀一郎附属学校部長の臨席を得て、校園長22名、副校園長37名、PTA会長35名、その他関係者総勢130名の合同総会となりました。

合同総会次第

司会進行：奈良女子大学附属小学校PTA	森川 誠
開会宣言：奈良女子大学附属幼稚園	会長 松平 竜丞
1.挨拶 近畿国立大学附属学校連盟	会長 船越 勝
近畿国立大学附属学校園PTA連合会	会長 竹川 裕之
2.来賓祝辞 奈良女子大学	理事 角田 秀一郎
全国国立大学附属学校PTA連合会	会長 岡山 和広
3.議事	
近畿国立大学附属学校連盟・PTA連合会	
平成26年度事業報告、決算報告、監査報告	
平成27年度新役員の発表・承認	
近畿国立大学附属学校連盟	会長 平井 肇
近畿国立大学附属学校園PTA連合会	会長 竹川 裕之
平成27年度事業計画、予算案審議	
4.閉会挨拶 奈良女子大学附属小学校	副校長 谷岡 義高
閉会宣言：奈良女子大学附属小学校	会長 渡邊 昌史



翌5月24日（日）に実践活動協議会を同じく奈良女子大学附属中等教育学校において開催しました。午前の開会式では、奈良女子大学今岡春樹学長より祝辞を頂きました。

その後、第一部では、国立研究開発法人理化学研究所理事長の松本紘（前京都大学総長）様による『育人』と題した記念講演を実施しました。人が人を育てるといことについて、ご自身の幼小期から現在に至るまでの経過を振り返りながら、「私の受けた教育」「私の研究生生活」「育人論」の三つの内容をお話されました。四つの「がくりょく」（「学力」「額力」「顎力」「楽力」）のある人を育てましようとして提起されていました。

第二部では、校種別分科会方式で「付箋思考法」による意見交換が活発に行われました。各校種のテーマは以下のとおりです。

幼稚園：初めての学校生活、初めてのPTA活動

小学校：子どもが生きる保護者の役割

中学校・高等学校：PTA活動の活性化と情報共有

特別支援：附属の特別支援の特色

全体会では、中等教育学校器楽部による演奏があり、各分科会での内容を全員で共有し、閉会しました。

この度の総会、実践活動協議会の開催に際して、附属学校園PTAの役員の方を中心として、前年度より数回の合同会議を持ち、近畿各地から来られる方々へのおもてなしのために準備していただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げますとともに、他校園よりたくさんの賛辞と感謝の言葉をいただきましたことをお伝えしたいと思います。



幼稚園・小学校公開研究会

平成28年2月12日(金)13日(土)の二日間にわたり、附属小学校の学習研究発表会を開催しました。

本年度は研究主題を、「自律的に学ぶ子どもを育てる『奈良の学習法』とアクティブラーニング～個の探究と相互の探究をつなぐ『生活学習力』を育てる～」とし、次期学習指導要領のキーワードともなるアクティブ・ラーニングに焦点をあてた研究会としました。

研究発表会の一日目は、公開学習①②で全教員が学習を公開し、その後の協議会を通して「自律的に学ぶ子どもを育てる」ことについての協議を行いました。また、午後からの全体会では、谷岡副校長が本附属小学校22年間の経験から「奈良で育つ子ども」との演題で講演会を行いました。

研究発表会二日目は、公開学習③④で全教員が学習を公開し、各教科ごとにアクティブ・ラーニングについての協議会を行いました。午後からの全体会では、新潟県上越市や神奈川県横浜市から、アクティブ・ラーニング実践者をお招きし、本校教諭杉澤を交え本学西村教授に進行をお願いしながらパネルディスカッションを行いました。その後、文部科学省初等中等教育局視学官の田村学先生に、「学習指導要領改訂の方向性ーアクティブラーニングの充実に向けてー」の演題で、ご講演をいただきました。

附属幼稚園では、「自ら遊びをつくりだす子どもを育てるー子どもの「生活」を丁寧にみとる保育ー」を研究主題として13日(土)に公開保育と全体会、分科会を行いました。全体会では、子どもの「生活」をどのように捉え、充実させていけばよいのかについて1年間の試みを発表しました。分科会でも、活発に意見交換され、実りある研究会となりました。

中等教育学校公開研究会

2月19～20日に公開研究会を開きました。

19日は「プレ企画」として「A. 数学・理科の融合授業の可能性をさぐるーSSH・理数シンポジウム」と「B. 21世紀型の教育のあり方を展望するー特設教科“コロキウム”自由見学」を開催しました。

前者では「ゾウリムシの個体群における密度効果の数学的解析」と題して、数学と理科(生物)教員による共同授業が行われました。その後のパネルディスカッションでは、授業者とともに奈良女子大学理学部の高須先生と渡邊先生(本校校長)がパネリストとして登壇し、理数教育・授業のあり方について活発な議論が繰り広げられました。後者についても財務省主計官の財政教育授業をはじめ、生徒諸君の活発な議論が交わされました。

20日午前は8つの分科会に分かれ、さまざまなテーマに基づいて多くの問題提起がなされました。

たとえば分科会①「戦後70年ー歴史を学ぶことの意味を問う」においては、戦後70年を迎えるにあたって、戦争体験者の聞き取り等を含むフィールドワークを実施してきたコロキウム選択生徒と5年日本史選択生徒が合同で授業に臨みました。議論の材料として、安倍首相の戦後70年談話と戦後40年時点におけるワイツゼッカー(ドイツ大統領)の演説内容とを比較しつつ、自らはどのようにこの問題をとらえればよいのかについて、議論が展開されました。授業後はパネルディスカッションとフロアとの意見交流がなされました。

午後は、30ほどのグループに分かれてラウンドテーブルが開かれました。全国各地から集まったさまざまな立場の方々からさまざまな問題提起がなされ、多くの参加者から「良い研究会だった」との言葉をいただきました。来年からも一層実りある研究会を企画していきたいと思います。

附属小学校22年間を振り返って

奈良女子大学附属小学校副校長 谷岡義高

38年間教師を務めてきてその約半分以上、22年間は奈良女子大学附属小学校の子どもたちと共に学習を創造することができた。奈良には、大正時代から長く主事を務め「学習原論」を書かれた木下竹次主事、戦後の「しごと・けいこ・なかよし」を構築された重松鷹泰主事がおられた。私はその偉大なお二人が先導して創られた子ども主体の学習の伝統の中にどっぷりつかり、子どもと共に奈良で学習の追究を進めることができた。

奈良女附小に赴任する前から重松先生の存在は知っていて、信州や静岡や京都で開催される研究会には毎年参加していた。そのため、子どもが地域の歴史や産業に学ぶ学習は、堺市の公立校にいるころから取り組みはしていた。しかし、不勉強にも、奈良女附小の存在は全く知らなかった。と言うよりも、そのころ奈良女附小はそれほど子ども主体の学習で有名ではなかったのではないかと思います。事実、私が赴任した当時、「えっ、授業中、先生が前で話をしている」「どの学年も、机がみんな前を向いている」「先生が黒板を書いている」「教科書を使って授業している」「行事も、先生がマイクを持ち子どもたちを動かしている」というのが、大方の現状だったように思う。

公立校の頃、私は仲間と一緒に、独自の地域学習を進め、そしてその手法を各教科の学習へも発展させて、「子どもと進める学習」に取り組んでいた。そこで体得してきていたのが、「学習は子どもと共に進めるもの」、「先生も子どもと共に輪になって座り頭を寄せ合って本気で意見を出し合うもの」、「資料作りから学習は始まるもの」ということであった。社会科を学ぶにしても、また、遠足・修学旅行に行くにも、資料作りから子どもと取り組んだ。農業では、子どもたちが八百屋、スーパーに通い、産地が印刷された段ボール箱をもらってきて掲示し、作物と生産地の変化を月ごとに追いかけたり、農業をしている自分の祖父母、親戚に手紙を書いたりして、全国からの資料を集めて学習を進めた。工業では、地域の全ての小工場を手分けして回り、地域の工場の実態を知ることから学習を始めた。遠足や修



学旅行も、事前に資料集を作り、読み合い、現地では聞き取り学習をし、戻ってきてから報告記を書くようにしていた。さらに、俳句や短歌でその風景を読んだり、カルタを作ったり、劇にして他の学年に伝えたりもした。これらは、若いころ読んでいた、フレネ教育、シュタイナー教育、サマーヒル教育などから影響されて、自分なりの理解で進めてきた学習だったように思う。

そして、奈良女附小に赴任して木下の「学習原論」に出会い、その学習法の緻密さにびっくりすることになる。私は、堺市にいるころに進めてきた「子どもと共に作る学習」を、奈良女附小では「奈良で育つ子ども」と置き換え、奈良を歩き、奈良のことを学ぶようになった。自分が奈良を知りたいという気持ちを子どもと共有し、飛鳥、葛城、斑鳩、平城京、そして京都、大阪へと歴史の流れに乗り「さんぽ」学習を通して地域学習を進めた。吉野、高野山、比叡山へも何度か行った。日々の学習は木下の独自学習という概念を根底に置き、「朝の元気調べ、自由研究発表、日記、テーマ研究」を中心に、子どもが構築していく資料を構成しながら学習を創っていった。楽しかった。出会い、深まり、分かる、さらに学びたい、がそこにはあった。理科も国語も算数も社会も、同じように子どもと共に学びを作った。幸せな教師人生だったなあ。



「3歳児 24名での『子ども会』」

附属幼稚園 松田 登紀

3歳児が1学級15名から24名となり、はや1年が経とうとしています。まだまだ甘えたい盛りの3歳児の子ども達ですが、少しずつ教師の膝の上から離れ、友達に興味をもちだしています。

2月の終わりには「子ども会（生活発表会）」を迎えました。自由選択活動の中でオオカミになった子どもが「ふーのふーのふー！！」とおうちを吹き飛ばしながらコブタを追いかけたり、オオカミが警察に捕まったり！「3びきのこぶた」のお話を遊びの中で楽しみながら、自分達の生活と重ね合わせ、「子ども会」では「こぶたようちえんのおはなし」を創作しました。ヒーローやオオサンショウウオもいる（?!）「こぶたようちえん」。練習の度にお話やセリフがどんどん変わり、毎回本当に「こぶたようちえん」にいるかのように楽しむ子ども達を見て、3歳児らしく、のびのびと自分らしさを出せるようになったなあ、と嬉しくなりました。

4月に家庭生活から初めての集団生活に入った子ども達。全くの異文化であった園生活を、生まれてたった3年の子ども達が自分で判断し、行動しながら自分の生活として受け入れ、全力で生きていく。そんな大変なことを全身で楽しんでいる子ども達の笑顔には自信が溢れています。



「親子講座」

附属小学校 堀本 三和子

附属小学校では、専門分野で研究されている大学の先生をお迎えして、親子で学ぶ「親子講座」を、昨年度から年2回、実施しています。これまでに、4人の先生方が講座を担当してくださいました。

第1回 松澤淳一先生（理学部）

「数学パズルの話」

第2回 高田将志先生（文学部）

「南極の話、地質や地震の話」

第3回 武藤康弘先生（文学部）

「縄文土器、土偶の話」

第4回 遊佐陽一先生（理学部）

「人の暮らしと生物の保全」

いずれの講座も、100組を超える親子の参加があり、5歳・1年・2年の部、3年～6年の部という二部に分かれてお話を聞きました。パズルを組んだり、粘土で土偶を作ったり、生物を水槽に入れて実験したりと体験を通して学ばせていただきました。ペンギンの写真や実物の縄文土器も見ることができました。子どもたちの「おたずね」に丁寧に答えていただき、専門の研究者からの学びが深まりました。共に学んだ保護者の行動力も高まると感じました。

大学の先生方が、普段接していない小学生（特に低学年）に対して、分かりやすいように体験を盛り込み、いろいろ工夫してくださったことに感謝しています。



「偶然の再会」

附属中等教育学校 長谷 圭城

このたび、1月18日に東京であった文部科学大臣優秀教職員の表彰式に参加させて頂いた。今年は、全国の幼稚園から高等学校までの教職員803名（国立21名、公立747名、私立35名）が表彰され、私は本校では4人目として表彰させて頂いた。段の上に10名ほどの文科省の幹部の方々が並び、750名を超える教員が表彰を直接受ける形式でした。

会場の列の中で、同じく式に参加していた、初任者洋上研修(現在は廃止)で10日間を共にした小学校教員に偶然、15年ぶりに出会い帰りの新幹線をともにした。偶然のうれしい再会であった。彼とは同室で、お互い28歳だった私たちの部屋は、新卒メンバーから長老部屋と呼ばれ、毎晩杯を重ねながらかれらの恋愛相談をきかされていたのを思い出した。

そんな彼も、初任から数年間は奈良中部の小学校で担任をしたものの、その後は教務畑へ。ここ6年は教務部長として学校を切り盛りする立場になっていた。年齢分布のいびつさで、40代前半から管理職になるケースがあると噂されていたが、彼がまさにそのケースなのではないか。

私もSSH主任として、少子化や縮小していく経済という課題を持った国の中で、実効性を伴いながらも理想の教育像を、目の前の生徒を前に考えていきたい。